

社会還元に向けた遺跡公園の活用 —東北地方を中心に—

多々良 穰

(金沢大学大学院人間社会環境研究科 博士後期課程)

はじめに

東北地方には多くの遺跡公園が存在し、行政も関わりながら整備が進められている。しかし、一部の有名な遺跡公園を除き、まだ十分に活用されていない面も見受けられる。本論では、遺跡公園に関する報告書や、筆者が実見した遺跡公園の現状をもとに、おもな東北地方の遺跡公園を概観し、社会還元に向けて取り組んでいる活動内容を整理する。

以前筆者は、文化資源の社会還元について、博物館での体験学習について整理し、地域イベントやボランティア活動、そして文化資源教育について述べた[多々良 2014]。本論ではさらに一步踏み込み、2013～2014年に実施した来館者への質問紙調査(以下アンケート)と面接調査(以下インタビュー)、そして職員に対するインタビューを通じて、利用者が遺跡公園を訪れる目的と要望を明らかにする。そして、持続可能な文化資源の社会還元を進めるために、どのように工夫し、どのような遺跡公園を目指すべきかを考察する。

1. 問題の所在

遺跡をどのように一般市民に還元すべきかを論じた研究として、「パブリック・アーケオロジー」¹⁾が知られる。この用語を初めて使用したのはマッグムジーであり、過去の遺産を守るために考古学を一般の人々に啓蒙することの重要性を述べた[McGimsey 1972]。この学問は、その後イギリスなどの英語圏を中心にさかんになり、一般市民が考古学をどのように理解し、受容しているかを解明するために、多くのデータを得る「量的研究」が行われた[Pokotylo and Guppy 1999; Merriman 2000 など]。一方、観察や面接調査によって、考古学を個人個人がどのように理解・関与しているのかを細かく分析する「質的研究」も増加した[Shankland 1996; Bartu 2000 など]。しかし、松田が指摘するように、「量的研究」で全体傾

向をつかんだ上で「質的研究」で深く分析することが重要である[松田 2012:40 頁]。筆者がアンケートとインタビューを併用しているのも、その観点に基づいている。

日本では「パブリック・アーケオロジー」という用語こそなかったものの、1万人の一般市民が自主的に発掘調査に参加し、考古学の意味合いと価値を見出すという状況が、1953年の岡山県月の輪古墳の発掘調査にすでに見られた。考古学が研究成果を社会と共有する、あるいは還元するという意味で、この学問の先駆とされている[田中 1986:20 頁、近藤 1994]。21世紀に入ると、用語もさかんに使用されており、最近では「文化遺産国際協力コンソーシアム」が2010年に研究会を開くなど[シャドラホール 2011、サウセド 2011、丸井 2011]、この学問は着実に広がりを見せている。

しかし、「パブリック・アーケオロジー」は遺跡や考古学調査・研究を対象としても、博物館や遺跡公園を分析対象にしてきたとは言えない。考古学に関連のある博物館や遺跡公園が、どのように一般市民に受け入れられ、歴史がいかに理解されているのか、その研究は不十分である。ただし博物館に関しては、どのように整備し、公開・活用すべきかについて論じた研究が進められてきた。特に利用者の立場から、博物館はどのように運営すべきかについては、布谷の研究に詳しい[布谷 2004、2005 など]。しかし、博物館と遺跡が一体化した遺跡公園を、どのように利用者に社会還元していくべきかという研究自体は、あまり進んでいないように思われる。

数少ない遺跡公園の活用についての研究事例として、「サイトミュージアム」に関する論文を挙げることができる[天野 2000、上地 2013 など]。筆者は本論で「遺跡公園」という用語を使っているが、上地は「サイトミュージアム」の定義として、(1) 史跡を有すること、(2) 史跡内あるいは史跡に併設する形で

展示施設（ガイダンス施設）を有すること、(3) 展示施設がその対応する史跡に関連していること、の三つを挙げている [上地 2013:6]。しかし、住民参加がなく、史跡と関連づけて教育活動を行っている館は少ないとしており [上掲書 8-9 頁]、筆者の考えとは異なる。住民が積極的に遺跡公園の行事や運営に関わり、遺跡公園が積極的に教育普及活動を行っている状況を明らかにし、その上で今後進めていくべき社会還元を論じたい。

II. 東北地方の遺跡公園

本論で東北地方の遺跡公園を取り挙げるのは、遺跡と博物館ないしガイダンス施設²⁾を併置した実例が多く、特にユネスコ世界遺産への登録に向けて活動が活発になってきているからである。筆者は、2013年7月から2014年10月にかけて、東北6県7か所の遺跡公園を訪問し、細部にわたって視察した。それぞれの遺跡公園について、遺跡と施設の概要を述べる。

1. 三内丸山遺跡

三内丸山遺跡は青森市にあり、縄文時代前期中頃から中期末（紀元前3000年～紀元前2200年頃）の大規模な集落遺跡である。1994年には、直径約1mのクリの巨木を使った大型掘立柱建物跡が発見され、永久保存・活用が決定された。その後1997年には国史跡、2000年には特別史跡に指定された。遺構としては、竪穴住居跡、大型竪穴住居跡、大人や子どもの墓、盛土、掘立柱建物跡、貯蔵穴、粘土採掘坑、捨て場、道路跡、配石遺構などが、出土品としては、縄文土器、石器、土偶、土・石の装身具、木器、骨角器などが発



写真1 三内丸山遺跡の大型竪穴住居（筆者撮影）

見されている。

遺跡公園内には、実物の遺構が見学できるように、遺構の保存処理や空調施設を完備した覆い屋を設置し、竪穴住居5棟、大型竪穴住居1棟、高床建物3棟、大型掘立柱建物1棟の建物が復元されている。2002年は、三内丸山遺跡のデジタルセンターとして「縄文時遊館」がオープンし、2010年にこの中の「縄文ギャラリー」を改修して「さんまるミュージアム」が公開された。映像で遺跡を紹介する「縄文シアター」もあり、入場はいずれも無料である。

2. 是川縄文館

是川遺跡は八戸市にあり、正式には「是川石器時代遺跡」と称し、1957年に国の史跡に指定された。一王寺遺跡（縄文時代前期～中期）、堀田遺跡（縄文時代中期）、中居遺跡（縄文時代晩期）をまとめて是川遺跡と呼んでいる。このうち現在公開している中居遺跡には、竪穴住居・土坑墓・配石遺構・捨て場・水さらし場（トチのアク抜きをするための場所）・土器棺墓に、写真入りの簡単な説明板が設置されている。風張遺跡から移築・復元した竪穴住居15・16号の2軒が、屋外展示されている。

是川縄文館（本館）は、2011年に開館したばかりの新しい博物館である。管理は八戸市埋蔵文化財センターで、国宝に指定された合掌土偶や八戸市内の遺跡から出土した埋蔵文化財を公開している。現在は「分館」となっている縄文学習館は、常設展示室（泉山氏と是川遺跡などについて展示）を無料で公開している。本館も分館も、是川遺跡（中居遺跡）内に建てられているが、現状では是川遺跡を整備・公開しているとは言えず、今後の遺跡調査を経てどのように開発していくかはまだ明らかでない [市川健夫氏による私信 2014.8.30]。

3. 御所野縄文公園

この遺跡公園は岩手県二戸郡一戸町にあり、縄文時代中期後半（紀元前2500年～紀元前2000年頃）の遺跡である。1993年には国の史跡指定を受けた。この遺跡の最大の特徴は、竪穴住居が土で覆う屋根構造だったことである。

御所野縄文公園は、土屋根住居、掘立柱建物、柱列を復元し、配石遺構や盛土遺構を露出展示し、縄文時

代当時の風景を復原している。縄文時代の植生を植栽し、いわゆる縄文の森も復原している。水場遺構は、「きききのつり橋」³⁾から下に見える樹皮や木材を貯蔵・加工するための施設である。現在、柱や屋根など住居建設に必要な材料がどのくらいのシナの木からとれるのか、実験考古学のデータを集めるために首都大学東京の研究グループによって使用されている〔中市日女子氏へのインタビュー、2014.7.31〕。

一方、御所野縄文博物館は2002年に遺跡公園内にオープンし、御所野遺跡から出土した遺物を展示しているほか、町内の文化財を紹介する郷土資料コーナー、体験工房などが設置されている。展示室は三つあり、第1展示室の「土屋根住居の発見」では、床をガラス張りにして遺構を復元し、焼失住居から土屋根住居を復元するまで過程を映像で紹介している。第2展示室の「御所野縄文ワールド」では、2014年4月にリニューアルしたばかり150インチの大スクリーンに



写真2 御所野縄文公園の西ムラ（筆者撮影）



写真3 万座環状列石（筆者撮影）

映し出される映像により、御所野遺跡の四季ごとの生活を紹介している。また、プロジェクション・マッピングによる臨場感のある3Dサウンドで、縄文時代を再現している。

4. 大湯環状列石（大湯ストーンサークル）

秋田県鹿角市に位置し、縄文後期前葉から中葉（紀元前2000年～1500年頃）に環状列石がつくられ、道路を隔てて東に直径42mの野中堂環状列石、西に直径48mの万座環状列石がある。この二つの環状列石を総称して、大湯環状列石という。いずれも、内・外帯を持つ二重の同心円を呈している。1956年に国の特別史跡に指定された。万座は150基以上、野中堂は50基以上の配石遺構からなる。この遺跡公園への入場は、無料である。

一方、ガイダンス施設として、2002年に「大湯ストーンサークル館」がオープンした。この施設は遺跡に隣接して建てられ、遺跡の保存活動や調査の紹介、遺物の展示や体験学習を行っている。入場料が必要な展示ホールには、遺物や写真パネルが展示されており、「環状列石と太陽」と題した天体ドーム模型によって、太陽の運行と環状列石の位置関係が映像で立体的に再現されている。また、体験学習室である縄文工房や、講座や講演などを開ける万座ホールなどがある。

5. 仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）

1988年の調査で、2万年前の人類の生活跡と森林跡が発見され、樹木やたき火跡を大地から切り離さずそのままの姿で保存処理をして展示・公開する「富沢



写真4 地底の森の地下展示
（地底の森ミュージアム提供）

遺跡保存館」(以下「地底の森」と記す)が整備された。保存と活用という背反する命題の間において、通常では目にする機会のない状況を公開している理想的な実物展示である[村井2006]。地底の森内部の地下展示「解き明かされる2万年前」では、ポリシロキサンで保存処理されたたき火跡や樹木群を発掘されたままの状態を見学できる。2万年前の旧石器時代の地層は標高約7mにあり、効果音を混じえた映像で当時の様子を再現している。常設展示では、炭化物や石器などの遺物や、保存処理された本物のガイマツの樹根が展示されている。館外には、旧石器時代の植生を復元する「氷河期の森」が公開されている。

6. 西沼田遺跡公園

この遺跡は山形県天童市にあり、6世紀を中心とする古墳時代後期の農村集落遺跡である。1987年に国の史跡として指定を受け、主屋、副屋、厨房、納屋、倉、作業小屋、米倉の7棟が復元展示されている。河川跡や水田に伴う畦畔・溝・井堰などの遺構も出土した。2008年に西沼田遺跡公園がオープンし、NPO法人西沼田サポーターズ・ネットワークによって管理・運営されている。この遺跡公園は、農業をテーマとした活用と天童市内の農業活動を関連づけ、地域を活性化することを目的としている[天童市教育委員会2009]。復元水田では古代米が栽培され、樹木の植栽による景観の復元も行っている。

ガイダンス施設では、エントランスホール、展示室、体験学習室が設けられ、職員専用空間として収蔵庫やその前室(研究用)がある。展示室では、食生活や木製品を使った当時の生活が解説されている。



写真5 西沼田遺跡公園(筆者撮影)

7. 大安場史跡公園

大安場古墳は福島県郡山市に位置し、1基の前方後方墳と4基の円墳からなる古墳群である。1号墳は、4世紀後半に造られた全長が約83mの東北地方では最大の前方後方墳で、2～5号墳は5世紀後半に造られた円墳である。1号墳と2号墳は2000年に国の史跡に指定された。2006年に一部が公園として公開され、2009年から全面公開されている。

この史跡公園は、古墳を保全して郷土の歴史と文化を普及させるため、古墳のほかに、ガイダンス施設、体験広場、冒険広場を整備した[大安場史跡公園2011:2頁]。ガイダンス施設には、展示室、映像室、体験学習室、体験コーナー、エントランスホールなどがあり、展示室では、旧石器時代から古墳時代までの遺物や暮らしが紹介されている。体験広場は、古代ステージ、野焼き体験場、煮炊き体験場、発掘体験場があり、イベント等で使用されている。冒険広場は、子ども向けと大人向けがあり、子ども向けのロープウェイは、ようやく2013年に除染作業が終了して使用可能となった。

遺跡公園の整備に関して、最近遺跡に併置する「ガイダンス施設」が増えている。これは、「史跡等活用特別事業」(ふるさと歴史の広場)で、この施設の建設が進められた結果である。この事業は1989年から始められ、歴史的な建造物の復元や、全体模型の設置、遺構の展示施設やガイダンス施設の建設などにより、主体的に遺跡を表現した。また、1995年から開始された「大規模遺跡等総合整備事業」(古代ロマン再生事業)でも、大規模な遺跡等の全容を再現し、往時の人間生活の全容を学び体験できる施設として、遺跡の復元的整備、学習施設等の整備を行ったことも大きく影響している。「ガイダンス施設」では、利用者の理解を深めるために、遺物の展示、パネルや映像を駆使した資料を展示している。「博物館」とは異なるが、遺跡公園に併設されている「ガイダンス施設」は利用価値が高い。

遺跡と「博物館」もしくは「ガイダンス施設」を一緒に公開するメリットは、展示遺物や解説パネルなどを学習しながら遺跡そのものを見ることで、当時の生活を来館者がよりリアルに感じ取ることができる点にある。遺跡を「保存」するだけでなく、史跡等を適

切に公開し、歴史や文化を学べるように施設を設置して「活用」しているのである [文化庁 2005]。ただし、行政主導の史跡整備ありきではなく、それは近年話題になることの多い「QOL (人生の質)」を高めるために、知的好奇心を満たすための空間づくりを進めようとしたことも背景にあると考えられる。

III. 調査の目的と方法

遺跡公園への来館者が、どの年齢層に多く、なぜ来館し、どんな活動をしたいのか、そしてどのような問題を感じ、何を要望しているかを明らかにすることが、本調査の目的である。考古学者や遺跡公園の運営側の考えだけでなく、利用者の視点から遺跡公園のあり方を模索する必要がある。

調査方法は、自記式であるアンケートと他記式であるインタビューを組み合わせた標本調査である。アンケートは多くの情報を得られる量的調査だが回収率が低く、インタビューは精度の高い情報を得られる質的調査だが手間がかかる [小松 2005:167 頁]。よって、アンケートを中心にインタビューで補足する形をとった。アンケートの対象は来館者、インタビューの対象は来館者や職員 (ボランティアも含む) である。回収方法は、遺跡公園の協力で施設内にアンケート用紙と筆記用具、箱を設置してもらって留置き式である。傾向を知るための質問は選択回答、具体的な意見を知るための質問は自由記述回答にした。

筆者がアンケート調査を実施し、100 枚以上のデータが回収できたのは、三内丸山遺跡と御所野縄文公園の 2 ケ所であった。そこで、地底の森と西沼田遺跡公園では、各施設が独自に行っているアンケート結果を参考にした⁴⁾。自由記述方式で、意見や要望について書いてもらった回答は、数にかかわらず有用なデータとしてすべてのものを扱った。統計学的に不十分であるが、一定の傾向は把握できるものと判断した。

- 三内丸山遺跡 (2012 年度来館者は 314,235 人 291 人 (筆者による調査))
- 御所野縄文公園 (2013 年度来館者は 27,325 人 163 人 (筆者による調査))
- 地底の森 (2013 年度来館者は 32,468 人 307 人 (施設独自))
- 西沼田遺跡公園 (2013 年度来館者は 15,065 人 375 人 (施設独自))

は川縄文館、大湯環状列石、大安場史跡公園では筆者によるアンケートを実施できず、施設独自のアンケート結果も入手できなかった。なお、紙面の関係上、質問項目すべてを掲載はせず、本論で使用する調査項目のみ記述していくことにする。

IV. 調査結果の分析

1. 居住場所

上記 4 ケ所の遺跡公園において、来館者の居住場所の内訳は表 1 の通りである。三内丸山遺跡は、青森市内 14%、青森県内 12% に対し、青森県外 73% であった。多くの人々が、青森県外から三内丸山遺跡を訪れている。三内丸山遺跡独自の調査でも、2012 年度の団体見学者の数が青森県内の 8,819 人に対し、青森県外からの来館者が 12,314 人となっており、県外からの来館者が多い [青森県教育委員会 2014:21 頁]。一方、御所野縄文公園では、一戸町内 7%、岩手県内 54%、岩手県外 39% である。岩手県外が比較的多いのは、一戸町が青森県境に近く、八戸市など青森県から多く訪問するためである。また、地底の森では、地底の森独自の調査によると、仙台市内 66%、宮城県内 12%、宮城県外 20% となっており、仙台市内の来館者が圧倒的に多いことがわかる [仙台市教育委員会 2014:15 頁]。また、施設独自の調査によると、西沼田遺跡では、天童市内 24%、山形県内 58%、山形県外 18% であり、天童市内と山形県内を合わせると 80% 以上になる [西沼田サポーターズ・ネットワーク 2014:9 頁]。

以上の結果から、三内丸山遺跡は全国的にも知名度が高く、関東地方からも多くの来館者があるものの、その他の東北地方の遺跡公園は、県内の地域住民が多く利用する施設だと言える⁵⁾。

表 1 来館者の居住地

地域	市内・町内	県内	県外	合計
三内丸山	42	35	213	290
御所野	12	88	63	163
地底の森	207	38	62	307
西沼田	84	207	65	356

2. 来館者の年齢層

4 ケ所の遺跡公園のうち、御所野遺跡を除く 3 ケ所では似た傾向が見られる。それは小中学生の来館者の割合が高いことである (表 2)。小中学生の割合は、

三内丸山遺跡で67% (表2の10代のうち193人)、地底の森で63% (表2の10～20代のうち198人)、西沼田遺跡で60% (表2の10代のうち214人)となっており、いずれも半数を越えている。御所野遺跡では、小中学生だけでなく、20代も含めた若い年齢層の来館が極端に少ないが、これは地元の小中学校が少ないうえ、遺跡公園に対して日常的に団体に関わることが多いため、わざわざアンケートに回答しなかったと考えられる。

全国区とも言える三内丸山遺跡にも、地元の小中学生や県外からの親子連れが多く訪れている (誰と来たかという質問項目で親子という回答が多い)。多くの歴史教科書に「三内丸山」が載っており、保護者も含めて関心が高い。他の遺跡公園でも、地元の小中学生が遺跡公園に親しんでいる様子がわかる。三内丸山遺跡は無料、地底の森も仙台市内の小中学生パスポートを使えば無料、西沼田遺跡も展示室に入らなければ無料であり、そのことも小中学生の憩いの場になっている大きな理由であろう。

以上のことから、今後の遺跡公園の運営に際して重きを置かなければならないのは、地元 (町内・市内) を中心とした近隣住民の、次世代を担う小中学生であろう。すでに、小中学生をターゲットにした取り組みには、2014年度から使い始めた三内丸山遺跡の低年齢用パンフレットなどが挙げられる。また、平日の来館は難しいとしても、20～50代の働き盛りの人々をいかに週末に遺跡公園に誘うかが課題となる。

表2 来館者の年齢層
(地底の森の場合は細かく分かれていない)

年齢層	10代	20代	30代	40代	50代	60代～	合計
三内丸山	209	17	13	15	15	19	288
御所野	7	12	25	20	28	71	163
地底の森	220			64		30	314
西沼田	215	21	55	39	16	13	359

表3 遺跡公園の情報源 (複数回答) (一はアンケートにない質問項目を示す)

情報源	テレビ	ネット	ポスター	新聞	雑誌	広報誌	知人	学校	その他	合計
三内丸山	17	42	14	8	30	8	38	19	32	208
御所野	10	13	36	12	6	14	39	4	49	183
西沼田	11	70	141	—	37	14	79	50	89	491

表4 来館目的 (複数回答) (西沼田の講演会にはイベントも含む)

目的	展示鑑賞	講演会	体験講座	実演	観光	ついで	見学会	宿題	個人研究	その他	計
三内丸山	96	1	21	0	136	49	9	31	37	38	418
御所野	63	10	10	1	74	15	3	8	11	22	217
地底の森	302	—	39	—	—	—	36	—	—	70	447
西沼田	53	73	199	—	46	—	23	—	—	53	447

3. 情報源

情報化社会においてインターネットによる情報発信は重要であり、表3のように、三内丸山遺跡で20%、西沼田遺跡で14%と多い。しかし、テレビはさほど高い割合ではなく、むしろ西沼田遺跡ではポスターやチラシの情報効果は29%と抜群で、御所野遺跡でも20%に及んでいる。注目すべきなのは、人から人への情報伝達である。知人や家族から話を聞いて遺跡公園に来たという人が、御所野遺跡で21%、三内丸山遺跡で18%、西沼田遺跡で16%と、いずれも高い割合を示している。さらに、学校から得た情報であると答えた人が、西沼田遺跡で10%、三内丸山遺跡で9%と一定の割合であった。御所野遺跡は、先述した理由で小中学生の調査回答が少なかったが、他の遺跡公園と同様の調査サンプルがあれば、結果は同じ傾向になったと思われる。

つまり、これまでどおりメディアやインターネットを駆使した広報に力を入れながらも、授業や教科書など学校教育が遺跡公園の訪問に大きく影響していることを遺跡公園側は自覚し、学校とのタイアップを意識していく必要がある。

4. 来館目的

表4は、遺跡公園に来館した理由を尋ねた回答結果である。三内丸山遺跡では、圧倒的に観光が多く33%を占める。観光のついでに立ち寄った人も17%もおり、これは観光効果が高い遺跡公園であることを示している。御所野遺跡も同様の傾向が見られ、34%が観光目的で訪問している。観光のついでに立ち寄った人も約7%いた。この二つの遺跡公園は、いずれも「北東北と北海道の縄文遺跡群」としてユネスコ世界遺産への登録を目指しており、知名度も高い。観光一

辺倒では問題があるが、広報活動に力を入れて遺跡公園を観光的な文化資源として活用することの大切さを、この数値が物語っている。

一方地底の森は、展示鑑賞が68%と非常に高い割合になっている。これは純粋に、博物館に展示物を見学に来た傾向が高いことを示している。奇をてらったものではなく、充実した展示を目指していくべきである。

また、西沼田遺跡公園で行われた独自アンケートでは、講座にイベントが含まれており、これを目的に来館した割合は高いと考えられる[西沼田サポーターズ・ネットワーク 2014:9 頁]。他の遺跡公園でもイベントの質問項目がないものの、地域イベントに力を入れている遺跡公園が多く、これを活用することも検討に値するであろう。

どの遺跡公園でも、比較的体験講座に力を入れているが、特にその傾向が顕著なのが西沼田遺跡公園である。43%に及ぶ来館者が、その目的で足を運んでいる。いかにうまく、地元の小中学生に遺跡公園へ関心を抱かせ、その空間に誘っているかがわかる。理想的な遺跡公園の一般市民への還元だと言えよう。

なお、筆者のアンケートで「宿題」や「個人研究」の項目を設けたところ、三内丸山遺跡と御所野遺跡では、小中学生は夏休みの自由研究のために、成人は個人研究のために訪れている場合も少なくない。他の遺跡公園ではこの質問項目がなかったが、小中学生が来館する割合が多い場合、宿題や夏休み等の自由研究を動機づけとして遺跡公園に足を運んでもらうことは、地域への社会還元として大いに進めていくべきであろう。また成人も、個人研究としての場を遺跡公園に求めており、高いレベルでの学習を求めている来館者への対応も考えていく必要がある。

5. 来館者の要望

アンケートを実施できた遺跡公園のうち、来館者から要望の回答を得たのは、三内丸山遺跡、御所野遺跡、地底の森の3ヶ所であった。地底の森で回答があったのは、次の二つの要望のみであった。

- ・積極的にPRして、遺跡を有効活用してほしい。
- ・地下の映像を見る際、余計な解説をせずにじっくり見させて欲しい。

三内丸山遺跡と御所野遺跡から出た来館者の要望の

主なものは、表5の通りである。もっとも多かった要望は、御所野遺跡で10人から出た「展示室を明るくしてほしい」である。御所野縄文博物館の第2展示室（シアター）は、プロジェクション・マッピングを見せるために暗く、かえって展示物が見にくい。音量が大きいことも重なって、子どもが怖がっていたという意見も多かった。次に多かったのは、両遺跡公園から出た「詳しい説明が欲しい」である。この要望は、博物館内というよりも外部展示に対してのものだと考えられる。特に御所野遺跡では、東ムラ、中央ムラ、西ムラの要所でも、詳しい展示解説（パネル）がない。インタビューでは、野外でも詳しい説明がほしかったという意見が複数寄せられた[60代女性へのインタビュー、2014.7.31]。

体験学習についての要望も、比較的多かった。三内丸山遺跡では、遺跡公園の敷地内で発掘調査が行われており、作業に余裕のあるときは調査員が簡単な解説をしてくれる。それゆえ、発掘体験を望む声が多いのだろう。また小中学生へのインタビューでは、体験学習メニューを増やしてほしいという要望が複数あった[10代男性へのインタビュー、2014.8.1]。

また、三内丸山遺跡に限った要望だが、入場無料に関するものがあつた。アンケートには「どんなことを質問したか」という問いをつけたが、「なぜ無料なのか」「保存の財源はどこから支出されているのか」といったものが目立った。入場料を無料にするなら、「少しでも入場料をとって保存や維持に回すべきではないか」といった要望とも意見ともとれる回答が複数あつた。また、遺構を保存するために空調施設のある覆い屋を設置しているが、夏場はかなり高温多湿になる。休憩場所の設置を求める要望も含め、夏場は体力的な問題も生じるようである。

休憩場所に関して補足するならば、表4の来館目的で「その他」と回答した人の中で、「余暇」や「近所」という理由を挙げた人がいた。地底の森独自の調

表5 利用者による主な要望（複数回答）

要望内容	三内丸山	御所野	計
展示室を明るく		10	10
詳しい説明（パネル）がほしい	3	2	5
体験コーナーを増やす	4		4
発掘体験がしたい	3	1	4
有料化して保存へ	4		4
シアター（解説）の音量を小さく	2	2	4
ドームを涼しく	3		3
休憩場所がほしい	3		3

査でも、余暇を利用してくつろげる居場所を求める人が多いことが指摘されている〔中谷 2014:35-36 頁〕。このことは、遺跡公園に地域住民に憩いの場を提供する役割があることを示唆している。

以上の要望を整理すると、①展示方法、②体験学習、③施設の改善、に大きく分けられる。施設の改善については、資金の問題もあるためここでは言及しないが、見直しが可能なのは展示解説であろう。御所野遺跡の場合、隣接する縄文博物館を見学した後であれば、外部展示について理解しやすい。解説パネルを新設できればよいが、困難であれば「博物館→野外展示」のルートを進めるような看板を設置するだけでも効果があるだろう。三内丸山遺跡のように豊富なボランティアがいれば、解説員を伴った見学が可能だが〔多々良 未発表〕、御所野遺跡では少なくとも平日は難しい。公園管理側の苦勞は理解できるが、シフトの見直しや増員など解説員の充実が望まれる。

V. 遺跡公園における社会還元の工夫

これまで見てきたアンケートやインタビュー結果から、工夫を凝らすべき社会還元の方法について考えた。第IV章の第4節で取り上げた地域イベント、そして第5節で見てきた来館者の要望の中から、体験学習と展示解説の合わせて3点について、今後目指すべき遺跡公園のあり方を提言する。

1. 地域イベント

遺跡公園を周辺住民に身近に感じてもらうため、各遺跡公園で工夫を凝らしたイベントが行われている。三内丸山遺跡では、2013年度から行事を増加させ、「縄文祭り」を春・夏・秋・冬の4回にして、9月の「縄文大祭典」と合わせて年5回のイベントを開催している。メニューも変化をつけ、春には高所作業車に乗って遺跡を空中から見学する縄文パノラマビューや、木の楔で丸太割りや石斧で木工体験するチャレンジ・ザ・じょうもん、夏には紙飛行機教室やこんちゅう教室、大祭典にはワークショップやお月見コンサート、冬には雪だるまコンテストや雪中宝さがし大会などを催した〔青森県教育委員会 2014:17-18 頁〕。夏祭りは文化観光拠点づくり支援協議会、縄文大祭典は同実行委員会が主催するなど、担当組織がやや複雑な面もある。

御所野遺跡では、公園の一斉清掃として、2014年4月に「春のクリーンデー」、11月に「秋のクリーンデー」が行われた。御所野遺跡のボランティア団体や地元団体、地元住民を合わせてそれぞれ170名を越える人が集まった。「春のクリーンデー」では、清掃後にボランティア「御所野発掘友の会」による手づくり料理も振る舞われた。5月には「春の御所野縄文まつり」が開催され、弓矢的当てゲームや火起こし、縄文クイズラリーやツリーイング（木登り）、フリーマーケットなどがあり、多くの家族連れで賑わった。また、地域の小中学校による演奏が、縄文公園の特設ステージで披露された。また、10月に「御所野工芸まつり～手づくり市」が開催され、陶器や竹細工、織物や染め物など様々な工芸品が販売された。

地底の森ミュージアムでは、10月に「地底の森フェスタ」が同館職員とボランティア共同で運営された。ミュージアム敷地内の芝生広場で開催され、石器づく



写真6 地底の森の「ハンター」
(写真提供：佐藤祐輔氏)



写真7 「ヌマリニック」の田力競争
(写真提供：水戸部秀樹氏)

り、やり投げ、編布服試着、小物づくり、料理試食が行われた。12月の「冬キラ」では、野外展示の氷河期の森の魅力と楽しみを広めるべく、カードを木につけたり、蜜蝋でクリスマスオーナメントを作ったりした〔仙台市教育委員会 2014:9 頁〕。しかし、2014年度初めて試みたのが「ハンター」の演出である。現代人には身近な活動ではなくなったが、旧石器時代や縄文時代など3万年以上もの間中心だった「狩猟」の道具を見つめ、食料を手に入れることの厳しさ、生きることの大切さを考えようと、7月から2ヶ月間、特別企画展「ハンター」を行った。この期間中数日に、民間の劇団が狩猟民に扮して臨場感ある効果的な演出を行い、来館者も楽しんだ（写真6）。

西沼田遺跡公園では、5月の連休には「ニシヌマタックル」が開かれ、カラー勾玉作りや管玉ストラップ作り、粘土の風鈴作りを行った。5月から半年間は、「にしぬまたんぼ楽校」と題して、古代米の田植えから稲刈り、収穫祭まで全5回の作業を行った。8月の夏休み期間には、「海より山より西沼田」と題し、はにわストラップや太陽の数珠プレス作り、草木染め、もち焼き、西沼田見学ツアーを実施した。体育の日には「ヌマリニック」と題して、古代七種競技による競争（写真7）、うまいもの広場（売店）、古代風芋煮などを振舞った。そして12月から3月にかけては、「冬を楽しむ西沼田」と題して、そば打ち体験、みそや豆腐作り、正月飾り作り、お菓子の家作りなどを行った〔西沼田サポーターズ・ネットワーク 2014: 3-4 頁〕。

大安場史跡公園でも、夏・秋の年2回行われ、「古墳まつり夏」には、大道芸、クイズバトル、火おこし選手権、勾玉ざんまい、ボランティア遊び、物産市が開催された。「古墳まつり秋」には、夏と同じ火おこし選手権、勾玉ざんまいやボランティア遊びコーナーのほか、ウォークラリー、地元中学によるホールコンサート、古代ライブ、人形劇も行われた。

以上のように、どの遺跡公園でも地域イベントを積極的に行っている様子がわかる。ただ、歴史と関連の薄い催しも散見された。遺跡と関連づけた催しを実践するのが、本来の遺跡公園のあり方である。ただの集客のためのイベントに終わることのないよう、運営側が工夫することが望まれる。

2. 体験学習

今や「体験学習」と銘打って、ほとんどの遺跡公園や博物館で取り上げられている。「体験学習」を取り入れる博物館が増える傾向にあることは、全国的に報告されている〔国立科学博物館 2007〕。「体験学習」といっても、その日に申し込めば子どもたちだけでも製作できる手軽なものから、古代の人々の生活を感じることができるような本格的なものまで様々である。

手軽なメニューについては、体験学習をしたいと思って来館する場合も、その場でしたいと感じてやる場合もあるだろう。この種の「体験学習」は、楽しむことでまたやってみたいという気持ちを持ってもらうことも副次的な効果だと思われる。三内丸山遺跡では、縄文自遊館にある「体験工房」を使って、ボランティア団体「三内丸山応援隊」が主催して「体験学習」が行われている。予約なしで毎日参加することが可能で、個人メニューとして、縄文ポシェット作り、編布作り、板状土偶作り、再生琥珀のペンダント作り、まが玉作り、ミニ土偶作り、組みひも作りができる。

1時間程度で終わることはできないが、数時間かけて当時の生活の一端を「経験」するメニューもある。是川縄文館では、縄文の布を編んだり、シカの角で釣り針を作ったりするが、モノの製作だけではなく、古代の食を味わうという「体験」も、いくつかの遺跡公園で行われている。三内丸山遺跡では、縄文グルメコンテストが2011・2012年の秋に行われた。青森県内の学生から縄文時代の食材と調理法を使用したレシピを募集し、予選と本選で腕を競い合った〔青森県教育委員会 2014:18 頁〕。是川縄文館では、毎月一度土曜体験教室を開き、10月と11月にはトチの実やドングリを食べる催しを行っている〔是川縄文館 2014:10 頁〕。ただ、これらの体験学習は、本当の意味での「体験」とは言い難い。「作る」や「食べる」という行為だけで終わってしまうからである。実際に作る経過や時間を体験することが、当時の生活に少しでも近づくことを意味する。

そういう意味で、食べるだけでなく、実際古代米を栽培して稲刈りもし、その米を消費するという体験学習も増えている。地底の森ミュージアムや西沼田遺跡公園では、近隣もしくは敷地内に田や畑があり、自分たちで稲作や畑作するという体験を通じて、古代の生活を毎年体験している。

先述したように、発掘体験を望む声がある。インタビューでも、発掘してみたいという要望が複数あった[10代男性・女性へのインタビュー、2013.7.31]。この要望に応える方法として、擬似発掘がある。遺跡での発掘体験が難しければ、博物館内で模擬発掘を行うことも可能だろう。実際に発掘作業で使用する道具を使って掘ってみることは、大いに考古学への関心を高めることに繋がるだろう。今回調査した東北地方の遺跡公園では発掘体験をしていなかったが、大阪歴史博物館と大阪文化財研究所では、大阪市内の埋蔵文化財の普及・啓蒙活動の一環として、児童が参加する体験発掘調査を実施し、学校との連携を行っている[大阪歴史博物館 HP]。また、自分の手で実際に触れる「ハンズオン」を取り入れている施設としては、地底の森の「旧石器体験教室」や「石器製作実演」が好評である[仙台市教育委員会 2014]。また、兵庫県立考古博物館で開催された「全国古代体験フェスティバル 2014」では、全国の博物館が様々な工夫を凝らした体験学習コーナーを開き、多くの来館者が古代体験に参加した[兵庫県立考古博物館 HP]。これらの事例は、若い世代に考古学を直に体験してもらう有効な「ハンズオン」体験である。

数ヶ月の時間をかけて行う体験学習メニューとして知られているのが、土器作りであろう。三内丸山遺跡をはじめ、是川縄文館、御所野遺跡公園、地底の森などで実施されている。御所野遺跡では、土づくりから始め形づくりや野焼きまで、全ての工程を体験でき、3～4回参加することが必要となる。また、東北地方ではないが、井戸尻考古館（長野県富士見町）では、2008年に小学6年生を対象に生地づくりから整形、

野焼きまでの工程で、土器づくりを体験させた。「約5か月かけて苦勞の末に土器を完成させたことは、教育的見地からも、土器づくりを文字通り『体験』するという考古学的理解の面からも、非常に意義ある体験学習だった」と学芸員の小松隆史氏は述べている[多々良 2014:130 頁]。

大掛かりな製作としてモデルケースとなるのが、家作り体験である。三内丸山遺跡では、2012年度から「さんまるムラづくり体験」を実施している[青森県教育委員会 2014:11-14 頁]。「縄文講座」と「家づくり体験」がセットになっており、「縄文講座」に2回以上、「家づくり体験」に3回以上及び完成イベントに参加できる者が参加条件である。長期にわたって継続することが必要で、根気のいる作業となるが、それだけに完成したときの充実感は格別だというのが、多くの参加者の感想である。現代の道具を使うのではなく、極力当時の人々が使用したのと同じような石斧で製作することも試みており、昔の生活を理解するためにも貴重な体験学習となる。このような体験学習を実施することはなかなか難しいが、当時の生活を味わうことができる真の体験授業だと言える。

体験学習については、単純に楽しみたいという立場と、より考古学を体験したいという立場があると思われる。メニューを増やすことは、人員や材料の問題もあるが、体験学習についての要望が多くあるのは、遺跡を見るだけでなく当時の人々の生活を体験して歴史を味わいたい、通常の生活とは異なった「ハレ」の空間や時間を感じ取りたいという気持ちの表れであろう。こうした体験学習を増加・改善していくことが、利用者の立場を考えた遺跡公園の還元につながるだろう。

3. 展示解説

展示解説は、遺跡公園の情報を来館者に伝える重要なツールであり、この工夫や方法によって来館者の関心や知識が大きく左右される。博物館やガイダンス施設で解説板があっても、施設外部の遺跡に適確な解説板がなければ、来館者の理解は難しい。人員が豊富ならば、要所に解説員を配置することが望ましいが、少なくともわかりやすい解説板の設置が求められる。

しかし、ここではより高度な展示解説について考えてみたい。三内丸山遺跡では、2013年11月まで「大



写真 8 三内丸山遺跡の「縄文家づくり体験」
(青森県教育委員会 2014 より転載)

型掘立柱建物」の解説板として、代表的な見解、建造物の解説、そして復元図の3枚があった。代表的な見解として紹介されていたのは、小林達雄案（天体モニュメント）、高島成侑案（シンボルタワー）、小山修三・大林組案（祭祀施設）であった。以下に、解説板2枚の全文を載せておく。

「小林案（非建物説）：天を貫く6本の巨本柱を夏至の日の出と冬至の日の入りを真正面に見据え、縄文人の祈りを天に届ける聖なるモニュメントと見る。

高島案（建物説）：三内丸山遺跡を発達した社会構成と組織を持った文化と考え、建物の性格を神秘的で、集落を象徴するようなシンボルタワーと見る。

小山案（建物説）：祭祀に係る施設と考え、さらに、周辺から見られる建物を想定する。新たな試みとして、柱穴の土質調査により根元にかかっていた圧力を計算し、建物規模を断定した」。

「この復元建物は、縄文時代中期後半（約4500年～4000年前）のもので、専門家の見解は、大きく建物説と非建物説に分かれています。目的や用途も祭殿や宗教的な施設、物見櫓、灯台、魚の見張り台、天文や季節を知るための施設などとする見方がありますが、現時点ではよくわかっておらず、三内丸山遺跡の大きな謎のひとつとなっています」。

「この遺構は、柱穴が3個ずつ2列に配置され、柱の間隔は4.2mと規則的です。柱の根入れは2mから2.5mで、柱穴は入念に埋め戻され、埋土が固く締まっています。また、出土した柱はクリ材で、その直径は最大で103cmもあり、根元を焼き焦がしてありました。また、柱が内側に若干傾いていたという可能性もあり、そうだとすれば、構造物の安定を保つために柱が上部で連結されていたと想定されます」。

「青森県では、これらのことから建物説に立ち、想定復元することにしました。上部構造は、県内に現存するクリの巨木の幹を参考に、高さを約15mとし、縄文尺（35cm）の倍数で、柱間と同じ4.2m感覚の3層の床を設けました。屋根については、その構造や材料についてさらに専門的に検討する必要があることから復元せず、今後の検討に委ねることにしました。屋根があったとすればどんな構造か想像をふくらませてみてください。復元には、6本の柱にロシア産のク

リ、その他の部材も県内産のクリを使用しました。遺跡の全体像や縄文人の生活様式などのさらなる解明が進み、目的や用途の想定ができれば、その実像に迫ることができるのではないかと考えています。したがって、今後の学術的な調査、研究によっては、この復元案を見直すことにしています」。

この解説板は老朽化して文字も読み取りにくい部分があり、わかりやすいきれいな解説板に一新された。2014年12月現在建てられている解説板は、次のような記述である。

「この復元した大型掘立柱建物は、発掘調査の成果や柱穴の底の部分にかかっていた土圧の分析結果などから全体の大きさを推定したもので、柱間と同じ4.2m間隔で床を作り、3層の建物としています。屋根についてはさまざまな説があることから現在のところ復元していません」。

「掘立柱建物は柱穴を掘り、柱を立て、床や屋根を支えています。ここから直径約2m、深さ約2mの柱穴が3個ずつ2列並んで見つかりました。これらの間隔はすべて約4.2mで、規則正しく配置されていました。柱穴の中からは直径約1mのクリの木柱が見つかりました。縄文時代中期後半（約4200年前）のものと考えられています」。

三内丸山遺跡内の解説板をすべて新調し、解説文も検討を重ねて理解しやすいシンプルな表現にしたという[岩田安之氏へのインタビュー、2014.8.1]。しかし、「詳しい説明がほしい」という要望が複数あり(表5)、インタビューでも「以前の解説の方が詳しくてよかった」と複数の来館者が答えている[50代男性、30代女性へのインタビュー、2014.8.1]。このことは、複数の学説があり、どのような理由で復元したのか、知りたがっている来館者もいることがわかる。また、柱が内側に若干傾いていた可能性があり、構造物の安定を保つために柱が上部で連結されていたという想定のもと復元されており、屋根の構造や材料についても今後の専門的検討に委ね、屋根をあえてつけなかったことがわかれば、来館者の建造物への見方も変わってくるだろう。こうした重要な情報は、多少解説が複雑になっても提供するべきである。以前の解説板に戻すの

は現実的ではないので、このような解説をどこかに展示することが望ましい。

屋根を復元しなかったことは、その構造を想像させる楽しみを残したとも言える。同様の考えが、御所野縄文博物館の展示にも認められる。第1展示室では、焼失住居から土屋根住居を復元するまで過程を映像で紹介しているが、映像は「縄文人はなぜ家を焼いたのだろうか?」という投げかけを最後に終わっている。これは、確実な答えがないというだけでなく、来館者自らがその問いに対して考えるよう工夫されている[高田和徳氏へのインタビュー、2014.7.31]。

地底の森ミュージアムでは、来館者の希望に応じて、地下展示室を中心に解説を行っている。地下展示室では、定期的に昇降式スクリーンが降りてきて、「2万年前のある日」が上映される。映像には、焚火の音や石を割る音、動物の鳴き声以外は音楽や音声がなく、最小限に抑えられた説明の字幕が出るだけである。したがって、字幕に合わせて解説員が、太古の森と人々の生活の様子を「語る」のである。上映時に照明が暗くなることと合わせて、臨場感あふれる非日常的空間を創り出し、来館者が地底の森を満喫できるよう工夫されている[中谷2013:26頁]。

このように、展示解説を工夫することで、来館者はより専門的な知識を得たり、想像力を使って当時の生活を考えたりできる。遺跡そのものならば、当時の景観の中でより「ハレ」の場に身を置くことになり、施設内であれば照明や音響効果によって、当時の雰囲気を作り出すことが可能であろう。

VI. 目指すべき遺跡公園像

第V章で見た地域イベント、体験学習、そして展示解説を充実させた上で、遺跡公園はどのような社会還元を目指すべきかを考えたい。

遺跡公園側が来館者の立場を考えていくことは当然の前提となるが、同時に来館者の要望を吸い上げる機会を作ることが重要である。来館者は遺跡公園に足を運ぶので、アンケート調査や話を直接聞くことが可能であるが、遺跡公園に足が向かない一般市民をどう動かすかが大きな課題となる。人が多く集まる場所に向き、意見を吸収する場を作ることも必要だろう。これまでのように、遺跡公園でイベントを催したり、魅力的な空間づくりをしたりするだけでは不十分であ

る。足を運んでもらえないのなら、遺跡公園側から足を運ぶアウトリーチが大切となる。では、どのようなアプローチが必要だろうか。

まず、若い世代を育てることである。概ね遺跡公園への来館者は小中学生が多く、彼らにもっと遺跡の重要性を知ってもらい、彼ら自身に遺跡とは何か、そこから何を導き出せるのかを考えてもらう機会を作ることが重要である。御所野縄文公園は、年間入館者数が3万人ほどの小規模な遺跡公園だが、次世代の育成にも力を入れている。2014年12月に、場所を比較的交通のよい一戸町コミュニティセンターに移し、「縄文考古学ジュニアフォーラム」を開いた。小・中・高の計12校16チームが発表し、地元一戸町だけでなく、隣県の青森県や秋田県からも参加があった。発表内容を児童・生徒が考え、教員がアドバイスし、わかりやすい発表方法を工夫する。このような発表機会の提供は、着実に考古学に関心を持つ層を創り出す。アウトリーチだけでなく、フィードバックも不可欠である。優秀な発表者を表彰するだけでなく、それをもとに遺跡公園側が学校を施設に受け入れて講演したり、人員に余裕があれば出前授業をしたりすれば、遺跡に「学ぶ」厚みある文化資源教育を実践することになるだろう。

また、実年齢や高齢者へのアプローチも必要である。考古学に関心を持ち、向学心のある一般市民を発掘するのである。是川縄文館では「考古学講座」を開いており、2013年度は「石器からわかること」をテーマに3回、「考古学研究・人類学研究最前線!」をテーマに4回実施した[是川縄文館2014:8-9頁]。是川縄文館は埋蔵文化財センターが運営しており、毎年「八戸市遺跡調査報告会」を行い、実際の出土品を展示・解説している。三内丸山遺跡でも、遺跡公園内で現在も発掘調査が行われており、定期的に現地説明会を実施している。また御所野遺跡では、2013年度に「世界遺産と縄文遺跡」や「縄文遺跡の世界遺産登録について」と題する講演会を開催し、北東北・北海道地方の周堤墓や環状列石などのモニュメントについて学ぶ機会を設けた。

東北地方は青森県・秋田県・岩手県が世界文化遺産への登録を目指していることもあり、世界遺産を意識したシンポジウムや講座も多く開かれている。2014年9月には、「縄文遺跡群世界遺産登録推進国際シン

ボジウム」を秋田市で開催し、北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録に向けて、国内外の専門家による意見交換を行い、地域住民と縄文文化・縄文遺跡の価値や魅力の共有を図った〔北海道・北東北の縄文遺跡群 HP〕。ユネスコ世界遺産への登録については一般市民の関心度が高く、今後も同様のアウトリーチ活動がなされていくであろう。

このように、若い世代から年配の一般市民まで、広い年齢層が遺跡公園と関わりを持つことで、遺跡公園は地域の生涯学習機関として機能する。ただし、動かずに待っているのではなく、自らが外向いて遺跡公園の価値を考えてもらう機会を創出することが、今後求められていくだろう。

おわりに

本論では、アンケートとインタビュー調査を実施し、量的研究と質的研究を組み合わせ、来館者の属性や傾向、意見や要望を明らかにした。そして、地域イベントや体験学習に積極的に取り組み、展示解説を充実することで遺跡公園を活性化し、地域住民および一般市民に対して還元すべきことを述べた。地域イベントによって、①遺跡公園に対する興味を起こさせることからスタートし、体験学習によって、②考古学や歴史に対してさらに関心を抱くことになり、高度な体験学習や展示解説によって、③知的好奇心を育てることになる。つまり、考古学や歴史を「知る」、「学ぶ」、「話す」というステップを遺跡公園が創り上げ、社会還元をするということになる。しかし、それは遺跡公園側からの一方的な働きかけで終わるのではなく、来館者からの働きかけも始まるという理解が必要である。よって、「受動」から始まり「能動」に移り、来館者自らが「還元」に携わっていくことが、持続可能な社会還元という実を結ぶことに繋がるのである（図 1）。自分が住んでいる地域に文化的価値の高い遺跡公園があることを実感すれば、文化資源を「誇る」ようになる。それが「地

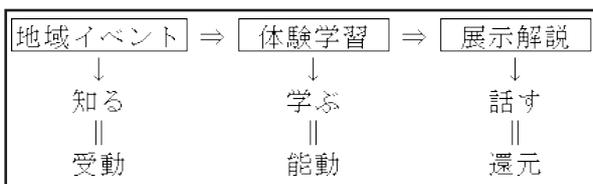


図 1 遺跡公園における来館者の姿勢（動き）

域アイデンティティ」の形成に繋がれば、遺跡公園と地域住民が結びつき、厚みのある社会還元となるであろう。こうした住民参加型の社会還元を持続的に進めていくためには、次世代の子どもたちの遺跡公園への興味を育て、大人たちの遺跡公園の知的好奇心を強くする積極的なアウトリーチ活動が大きな鍵を握っていると言える。

本論の調査データ数は不十分であり、遺跡公園の運営側の実情や意見が汲み取れていないなど、課題も多い。しかし、今後遺跡公園が社会還元に向けて重要な役割を担っていくために工夫すべき、具体的な体験学習や展示方法を示すことができた。今後は運営側の意見も集約し、より実現可能な方策を検討していきたい。

謝辞

本論を執筆するにあたり、岩田安之氏（三内丸山遺跡）、市川健夫氏（是川縄文館）、高田和徳氏、後藤宗一郎氏、中市日女子氏（御所野縄文公園）、藤井安正氏（大湯環状列石）、佐藤祐輔氏、中谷可奈氏（地底の森ミュージアム）、奥山奈津子氏（西沼田遺跡公園）、押山雄三氏（大安場史跡公園）、小松隆史氏（井戸尻考古館）をはじめ、その他多くの方々調査にご協力くださった。末筆ながら感謝申し上げます。

註

- 1) 「パブリック」は「一般市民」や「公共」、「官民」、「社会」などを指すが、どれも完全に当てはまる訳語ではなく、文脈から「市民のための」や「市民の手による」という視点が欠落する。よって、日本で一時使用された「公共考古学」という用語ではなく、「パブリック・アーケオロジー」と表現することが適当だと松田は述べている〔松田 2012:21 頁〕。
- 2) 「ガイダンス施設」と「博物館」の違いは、「調査研究」が行われているか否かであろう。ただし、厳密に「ガイダンス施設」と「博物館」もしくは「資料館」を分ける法律は存在しない。博物館法第 3 条では、博物館を「資料収集」・「資料展示」・「調査研究」・「教育普及」の事業を行う施設としているが、これらすべての事業を行わなくても、博物館もしくはミュージアムという呼称を用いることができる。
- 3) 駐車場から「きききのつり橋」を渡って谷を越え、向かい側の博物館と遺跡に入る。この橋は木製の歩道橋で、木材の「木」、奇抜の「奇」、渡る喜びの「喜」から命名された。

- 4) 本論で言及する7遺跡のうち、是川縄文館、大湯環状列石、大安場史跡公園におけるアンケート結果は入手できなかった。また、三内丸山遺跡と御所野縄文公園から年間のアンケートによる情報を提供していただいたが、質問項目が筆者のものと一致しないものが多かったため、本論では扱わなかった。
- 5) 具体的な数値は公開されていないが、是川縄文館、大湯環状列石、大安場史跡公園でも、職員またはボランティアへのインタビューで、来館者は地元中心であるという情報を得ている。

引用文献

青森県教育委員会 2014『特別史跡三内丸山遺跡年報』17 平成25年度。

天野秀明 2000「斎宮歴史博物館のリニューアルといつきのみや歴史体験館の開館について—史跡斎宮跡のサイトミュージアムとしての活用をめぐる—」『博物館研究』No.354; 24-28頁 日本博物館協会。

上地翼 2013「サイトミュージアムにおける教育活動の意義—これからの博物館利用と博物館教育に関する課題—」奈良教育大学提出修士論文。

大安場史跡公園 2011『大安場史跡公園年報—平成21年度版—』財団法人郡山市文化・学び振興公社。

国立科学博物館 2007『第7回全国博物館ボランティア研究協議会概要』独立行政法人国立科学博物館。

小松洋 2005「調査票調査のプロセスとデータ化作業」『社会調査へのアプローチ』第2版 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武編 ミネルヴァ書房。

近藤義郎 1994『月の輪古墳』吉備考古ライブラリィ1 吉備人出版。

ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ 2011「ペルーにおけるパブリック・アーケオロジ—日本人考古学者の影響—」『第6回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書 遺跡の情報発信と地域への還元—パブリック・アーケオロジ—からみる国際協力—』18-25頁、文化遺産国際協力コンソーシアム。

ティム・シャドラホール 2011「パブリック・アーケオロジ—その考察領域および21世紀における発展—」『第6回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書 遺跡の情報発信と地域への還元—パブリック・アーケオロジ—からみる国際協力—』8-17頁 文化遺産国際協力コンソーシアム。

仙台市教育委員会 2014『地底の森ミュージアム年報』2014 平成26年度。

多々良穰 2014「日本における文化資源の社会的還元に

ついて—博物館と遺跡公園の現状を踏まえて—」『人間社会環境研究』第27号 121-138頁 金沢大学大学院人間社会環境研究科。

多々良穰 未発表「遺跡公園におけるボランティアの役割と社会還元」2014.10.26脱稿。

田中琢 1986「総論—現代社会のなかの日本考古学」『岩波講座 日本考古学』7 現代と考古学 近藤義郎・横山浩一他編 1-30頁 岩波書店。

天童市教育委員会 2009『西沼田遺跡整備事業報告書』。

中谷可奈 2013「遺跡博物館における『語り』の役割—地底の森ミュージアム来館者アンケートの考察から—」『地底の森ミュージアム研究報告』2012 23-31頁 仙台市教育委員会。

中谷可奈 2014「変容する、遺跡博物館への期待—2013年度地底の森ミュージアム来館者アンケート分析—」『地底の森ミュージアム研究報告』2013 33-38頁 仙台市教育委員会。

布谷知夫 2004「利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究」総合研究大学院大学提出博士論文。

布谷知夫 2005『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』雄山閣。

西沼田サポーターズ・ネットワーク 2014『平成25年度 天童市西沼田遺跡公園 管理運営・事業報告書』。

文化庁 2005『史跡等整備のてびき—保存と活用のため—』文化財部記念物課編 同成社。

松田陽 2012「世界のなかのパブリック・アーケオロジ—入門パブリック・アーケオロジ—」19-40頁 同成社。

丸井雅子 2011「カンボジアにおける考古発掘調査と地域への還元」『第6回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書 遺跡の情報発信と地域への還元—パブリック・アーケオロジ—からみる国際協力—』26-32頁 文化遺産国際協力コンソーシアム。

村井実 2006「遺跡・遺構の保存と展示法」『史跡整備と博物館』青木豊編 162-186頁 雄山閣。

Bartu, A. 2000 Where is Çatalhöyük Multiple Sites in the Construction of an Archaeological Site. In Hodder, I. (ed.) *Towards Reflective Method in Archaeology: The Example of Çatalhöyük*, Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research, pp.101-109.

McGimsey, C. R. III 1972 *Public Archaeology*. New York and London: Seminar Press.

Merriman, N., 2000 *Beyond the Glass Case: The Past, the Heritage and the Public*. London: UCL Institute of Archaeology.

Pokotylo, David and Neil Gupp 1999 Public Opinion and

Archaeological Heritage: Views from Outside the Profession. *American Antiquity* 64(3): 400-416.

Shankland, D. 1996 Çatalhöyük: The Anthropology of an Archaeological Presence. In Hodder, I. (ed.) *On the Surface: Çatalhöyük 1993-95*, Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research, pp.349-358.

閲覧ホームページ

大阪歴史博物館 (2014.12.29 にアクセス) : <http://www.mus-his.city.osaka.jp/education/school.html>

兵庫県立考古博物館 (2014.12.29 にアクセス) : <http://www.hyogo-koukohaku.jp/events/p6krdf0000005qf8.html>

北海道・北東北の縄文遺跡群 (2014.12.29 にアクセス) : <http://jomon-japan.jp/archives/3293/>